

ピアノ・マン

雪月ユキツキ 彩夏サイナ

私は演奏を終え、鍵盤から手を放した。閉店時間が迫ったバーの店内は人が少なく、薄暗く照らされている店内が余計に暗くなって見える。

「アンドリュー、今日はもうあがって良いぞ」

オーナーのビリーが私に声をかける。私はわかりました、と答えて店の奥にある物品倉庫へ入った。予備のグラスや空いたボトルの箱が積みあげられた奥に据え付けられたアルミ製の椅子、それが私の家^{ホーム}。

私はNRD114、US社によって開発された業務用アンドロイド。このお店ではみんなからアンドリューと呼ばれている。

今の時代、私のように人間に代わってロボットが会社の受付、ウェイターや家事手伝いなどの仕事をするのが珍しくない。かくいう私は、このバーでピアノを弾く仕事を任されている。特にお客様のリクエストに応えることを厳命されている。

そのため私には多くのピアノ曲がインプットされている。モーツアルト、ベートーベン、ショパンはもちろんのこと、ジャズのスタンダードナンバーからポップソングのピアノアレンジまで、様々な曲を譜面通りに弾くこ

とが出来る。

私は椅子に腰掛け、金属で覆われた体を密着させる。椅子は私の充電器にもなっているのだ。私は目を閉じて自らの電源を落とす。

*

翌日私が起きると目の前にビリーがいた。営業時間の少し前に私は電源を入れられ、そこから私の一日が始まる。

私は物品倉庫を出、私の仕事場であるグランドピアノへと行く。店内ではもう開店の準備を終えお客様が来るのを待っていた。私はグランドピアノの蓋を開け、それから椅子に座ると鍵盤に指を置いた。

数分もすれば最初のお客様が店の戸を開けるだろう。私はサティのジムノペティ一番を弾きながらお客様を迎えることにした。

週末と言うこともあって、今日は数時間もするとお客様でいっぱいになった。お客様のリクエストも多く、エソナを弾いてくれという外国人のお客様のリクエストにも難なく応えた。

お客様の混雑も一段落した頃、若い女性が私の元へやってきた。顔はやや赤くアルコールが回っているようだ

が、どこか悲しそうな顔をしている。

「リクエスト、良いかしら」

「どうぞ、なんなりと」

「私を月に連れてって」

「私を月に連れてって、ですわね？ アレンジはどういた

しましょうか？」

彼女は少し考えてから、任せるわと言った。

「ではボサノヴァ調で」

任せると言われた時は一番無難なものを選び、とビリ
ーから言いつけられている。私は言ってから少し置いて、
鍵盤の上で指を動かし始める。はじめ女性はリズムに合
わせて体を小さく揺らしていたが、気付けばそれをしな
くなっていた。

私が譜面通りに弾き終えると、女性はさつきよりも悲
しそうな表情で、違うわと言った。

「違う？ お気に召さなかったのなら別のアレンジでも
う一曲……」

「いいえ。そういうことじゃないわ」

私は首を傾げた。違うとはどういうことだろうか。私
はインプリントされた譜面通りにミスなく弾いた。違うと
ころなど一つもないはずだ。

「あなたのピアノには、心がないのよ。むき出しになっ
た金属の肌と同じ、冷たい演奏」

「心……ですか？」

「そうよ。まあ、そもそもロボットのあなたには無理な
注文だったかしら……」

そう言いながら女性は俯いてしまった。私は困った。
これではお客様のリクエストに答えることが出来ていな
い。

「お客様のリクエストされた曲を弾くのが私の仕事で
す。しかし今はそれが出来ていない。次のご来店まで
お客様のリクエストに答えられるようにします。もう一
度、チャンスをいただけませんか」

女性は顔を上げ私を見た。なにか言い掛けてやめ、小
さく笑うと私に背を向けた。

「また来るわ。無理だとは思うけど、頑張つてね」

と言うとグラスに残っていたマティーニを飲み干し店
を出て行った。

今日は閉店まで客が絶えなかったが、ピアノを弾き続
けてもずっと女性のことが気にかかってしまっていた。

閉店してからいつものように電源を入れにビリーがや
ってくるまで私はアルミの椅子に座ったまま電源も落と
さず、ずっと考えていた。

心のある演奏とはどんなものだろうか。譜面通りに弾
くことではないのだろう。しかしそれでは間違いだ。正
しい演奏ではなくなってしまう。

私の電源が入ったままになっていることにやってきた

ビリーが驚きの声をあげた。

「アンドリュー、どうしたんだ。なぜ電源を落としてない」

「少し考え事をしてました」

「考え事？」

私はビリーに女性のことを話してみた。

「ふむ。演奏に心がない、ねえ……」

ビリーは両腕を組んでうなり声をあげて固まってしまった。

「やはりアンドロイドの私には無理なのでしょうか」

その台詞にビリーは余計に困った顔になって黙ってしまつた。このまま仕事が全うできない不良品として処分されてしまうのだろうか。所有者をこのように悩ませるというのは、私は故障しているのではないか。

そう思い至って自己修復ツールを立ち上げようとしたとき、ビリーの口からよしという言葉がこぼれた。

「このまま演奏でミスなんかされても困るからな。一旦そのことは忘れろ。その代わり、解決になるかはわからんが次の定休日にプロのジャズコンサートに連れてつてやる」

「コンサート？」

「ああ、古い友人のコンサートだ。楽屋にも入れて貰えるだろうから、そいつに聞いてみると良い」

そこで私に足りていないものが見つかるのだろうか。

プロフェッショナルの演奏からなら、きつと見つかるはずだ。次の定休日までの間、淡々と仕事をこなしながらも私はやはり何が足りていないのか考えるのはやめなかつた。

*

開店時間よりずっと早く、私の元にビリーがやってきた。今日は約束の定休日、私は前日から電源を落とさずビリーが起こしにくるのを待っていた。

「また電源を落としてなかったのか。最近のおまえはどこ変だ」

そう言っているビリーの顔は晴れていた。古い友人に会うのが楽しみなのだろう。

私はアルミの椅子から腰を上げる。さあ行くぞ、と言って背を向けたビリーの後に続いて店を出た。

コンサートの会場に人はまだまばらだった。私はビリーの隣の席に座って開始を待っていた。時間が過ぎて行くにつれて人が増えてくる。そんな中にロボットは私一人。労働のためのロボットをコンサートに連れてきてるのが物珍しいのだろうか。じろじろと見てくる人間も少なくなかつた。

私はコンサートが始まるのが待ち遠しかった。考えて

みれば他の人の演奏を私は聴いたことがなかった。楽譜通りなら誰が弾いても変わらないはずだが、女性の言葉からするとそうではないのだろうか。

床を見つめながらそう考えていると、すーっと辺りが暗くなつていき、ぼろんと綺麗なピアノの音が響くとそれに続くように、音が次々と紡がれていく。

不思議な感覚だった。会場を音が包んでいき、私は曲に引き込まれていく。同じ楽器での演奏のはずなのに私が弾くそれとは決定的になにかが違っていた。

あつという間に一曲が終わり、スポットの当たったグランドピアノから一人の男性が立ち上がった。彼がビリーの友人だろう。

男性はペこり、と一礼すると床に置いてあつたマイクを手を取った。

「みなさん、こんばんは。今日は私のコンサートにおいでくださってありがとうございます。つたない演奏ですが、最後までお付き合いください」

つたないなどと謙遜するような演奏ではなかった。私は反論したくてたまらなかった。

「一曲目は私のオリジナルを聴いていただきましたが、次の曲はスタンダードナンバーから、虹の彼方にお送りします」

そう言ってまた一礼すると椅子に座り、一度深く息を吐いた。そしてその動作から流れるように演奏が始まる。

しかし一曲目と同様、一音目から私の演奏とは決定的に違っていた。私の知っている曲と同じはずなのに、楽譜にはない音が奏でられている。それなのに曲は虹の彼方なのだ。しかも私が弾くそれよりもずっと音が弾んでいるように聞こえる。そしてなにより心地がよい。

私は演奏者を見た。演奏に集中しきっているがとても嬉しそうな表情を浮かべている。曲の世界に心酔しきっているような、そんな感じだ。

これが心のこもった演奏――。

曲の世界に引き込まれていき、気づけばコンサートは終わりを迎えていた。

*

コンサート後、ビリーをせっついて私は彼の友人の楽屋へ急いだ。あの演奏の秘密を聞き出したいとたまらなかった。

「よお、お邪魔するぞ」

楽屋に入ったビリーを見て、友人は笑顔を浮かべた。

長く何曲も演奏して汗だくになっているがとても晴れ晴れとした笑顔で彼は私たちを迎えた。

「ビリーじゃないか。来てくれたのか！……そっちは？」

彼は私を見て不思議な顔をした。なぜロボットを連れ

ているんだい、と言いたげだ。

「ああ、こいつはうちのバーでピアノを弾かせてるアン
ドリュード。ちよつと色々あつて、お前の話を聞かせて
やりたくてな」

私は紹介されて彼に軽く会釈をした。手を差し伸べて
きたので、私は彼と握手を交わす。

「初めまして。ぼくはチャーリー。ぼくに聞きたいこと
つて、一体なんだい？」

私はビリーに話したように女性のことをチャーリーに
話した。彼はなるほどね、と呟いた。

「あなたの演奏の秘密が知りたいのです。私の演奏とあ
なたの演奏の違いはなにか、私の演奏に足りていないの
はなんなのか……」

彼は奥からなにか一枚の紙を持ってくると、私に差し
出した。それはA4一枚に書かれた短い楽譜だった。

「短い曲のようですね？」

「今日弾いた、虹の彼方に^{スコア}の楽譜だよ」
私は驚いた。そんなはずはない。あれはこんなに短い
楽曲ではないはずだ。

「君は楽譜通りに弾く、と言ったね。ぼくも楽譜通りに
弾いた。けどぼくが弾いているのはそれだけだ」

言っていることが理解できなかった。これだけ？ そ
んなはずかない！

「ジャズは即興演奏だからね。取り決めはそれだけしか

ないんだよ。あとは自由に弾く」

「自由に……ですか？」

「そう。大事なものは楽しむこと。そして相手を楽しませ
ることだと、ぼくは思っている」

楽しむことと、楽しませること――。

そう言われて私は、あの女性の悲しそうな表情を思い
出していた。

「君はオズの魔法使いに出てくるブリキのきこりのよう
だね。心^{ハート}が欲しいと言うけれど、きつと君はもう持つ
ているんじゃないかな」

いつからか私は彼女に笑って欲しいときえ思っている
ことに気がついた。どうすれば笑わせることができるの
だろうか、と。

彼はそんな私を見て笑顔を向けた。私は笑顔を返した
かったが、私には表情を変える機構は付いていない。代
わりに深い一札を返した。

*

突然電源を入れられると視界に不安げなビリーの表情
が映った。

「私は……」

辺りを見回すと、いつの間にか家^{ホーム}に戻されている。

「びっくりしたぞ。店に来てみたらピアノの前でおまえ

が倒れてたから急いでここに運んで充電したんだ」

「昨日帰ってから、ずっとピアノを弾いていました。そうか、それでバッテリーが切れたんですね」

「ベリーはやれやれ、とぼやいた。」

「開店時間になったら起こしに来てやるからそれまで寝てろ。練習の成果を本番で出してもらわにや困るからな」

「ベリーは頭をかきながら私に背を向けた。今になって初めて私は良い持ち主を得たのだと思い知らされた。」

「ありがとうございます」

「ベリーは背を向けたまま、頭をかいていた手を振った。それを見届けてから私は言われたとおりに電源を落とした。」

開店時間直前に起こされ、私は仕事場に急いだ。ピアノの準備を終えて位置についたのと同時に最初のお客様がやってきた。私はこれからの時間を楽しんでもらえるよう鍵盤の上の指を滑らせながらお客様をお迎えをした。

お客様はいつもより少なく感じたが、曲のリクエストはいつもより多かった。私は聴いてくださるお客様のことを考えながら自分なりに楽譜をいじって弾いてみる。疲れているお客様には癒しを、落ち込んでいるお客様には元気の出る曲を。

私はお客様のことを考えて弾くことが心地よかった。

そして私の曲に返ってくるお客様の笑顔を見るのが嬉しかった。これがチャリーの言っていた大事なことか。

しばらくして、重たい扉を一人の女性が開いた。あの晩の女性だ。今日もどこか物憂げな表情を浮かべている。

彼女はカウンターで前と同じようにマティーニを受け取るとそのまま私の元へとやってきた。

「約束を果たしに来たわ。リクエストはあの晩と同じ……」

「私を月に連れて行って、ですね。今日は私のオリジナルアレンジを聴いてください」

そう言ってピアノに向かうと私は目を閉じた。私は女性の笑顔を想像してみる。綺麗な笑顔が浮かんで、私は本物の笑顔を見てみたいと思った。

私はゆっくりと鍵盤を叩き始めた。頭にある楽譜はあの虹の彼方にと同じだけの、短い取り決めだけ。あとは私の自由だ。

目を閉じたまま私は自分の音の世界に吸い込まれていくようだった。次から次へと奏でたい音が浮かんで、曲を紡いでいく。

自分で弾いていて終わるのが惜しかった。私は最後の音を弾き終え、鍵盤から手を放して目を開いた。

最初すぐ横から拍手が聞こえたかと思うと、いつの間にか店内を拍手が包んでいた。

私が辺りを見回すと店内の全員が手を叩いている。横

の女性は涙を流しながら、私が想像していたよりもずっと素敵な笑顔を浮かべていた。

私はその表情をどう解釈すべきか迷っていた。

「……お気に召しませんでしたか」

彼女は涙を流していたことに気づき、目元を拭うとまた笑顔を向けてくれた。

「いいえ。最高の演奏だったわ、まるであの人が弾いているみたいで……素敵な心のこもった演奏だったわ」

私はその言葉がとても嬉しかった。リクエストに応えられたよりも彼女に笑顔をとり戻せたことが私は喜びだった。

「心がないなんて言っつて、ごめんなさい。あなたの演奏にはちゃんと心があるわ。……あなたの演奏を聴きここに通つてもいいかしら？」

「はい、私がお客様を楽しませるためにピアノを弾いています。それが私の喜びでもあります。私のピアノでしたら、いつでも聴きに來てください」

私は彼女に笑顔を返せないことが歯がゆかった。今度ビリーに言つて笑顔ができるように改造して貰おう。

彼女はマティーニを一口飲んでから私に言った。

「ありがとう。もう一曲、リクエストしても良いかしら？」

「どうぞ、なんなりと」